

田和山の森から

第 248 号
令和 7 年 6 月 6 日
里山を育てる会

キンランを楽しむ会

今年の「キンランを楽しむ会」は、連休最終日の 6 日に行いました。予定していた時間帯は天候も良く絶好の観察会日となりました。参加者は会員を含め 40 名あまり参加がありました。



竹下会長がキンランの生態や、これまでの活動状況について説明を行い、その後に林内を散策路沿いに見て回りました。

当日までに確認できたのは、279 株でしたが、最終的には 293 株(5 月 30 日現在)で過去最高となっています。



当日は、山陰中央新報と読売新聞の取材があり、翌日付の紙面に掲載されました。

5 月の作業から

シイタケの本伏

3 月末に菌打ちを行ったシイタケについて、

17 日に本伏を行いました。この原木にシイタ



ケが発生するのは来年の秋以降となります。それまでの 1 年半このままの状態にしておきます。(写真中央の二つが今年で奥側に見えるのが昨年度分)

6 月の予定

主たる作業

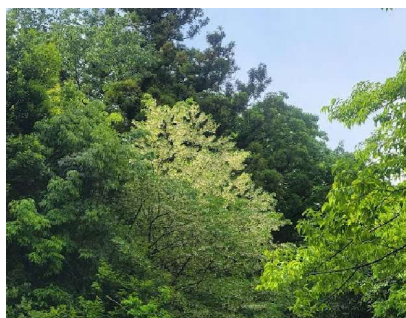
- ・タケノコ(マダケ)採取
- ・東側斜面クヌギ林の草刈り
- ・カブトムシの養殖
- ・ササユリの観賞

(5 月 30 日現在早いものが 4 輪咲いています)



田和山の樹木 第 61 回 エゴノキ

4 月の終わりから 5 月初めにかけ、鈴のような花が枝先いっぱい咲かせているのがエゴノキです。新緑と白花のコントラストは美しく、エゴノキを「森のシャンデリア」と例えられることもあります。花が終わる頃には、エゴノキの株元には雪を散らしたように花びらが散っています。田和山には少なくとも 10 本以上のエゴノキがあります。



エゴノキは北海道南部から沖縄までの雑木林に見られるエゴノキ科の落葉高木です。

枝はジグザグに屈曲しながら伸び、一年生の枝にも特徴がよく出ており、枝は紫色の混じったような褐色で細く、葉は有柄で枝に対しては互生し、付け根に冬芽を 2 つ付けており、この芽が種を検索する際の参考になります。

果皮には、有毒成分(エゴサポニン)を含んでいますので注意が必要です。

(写真左は、満開のエゴノキです。中央の写真が一年生の枝で花柱を残した丸い実、右が幹で縦列の裂け目があります。)



今後の活動予定 6 月 6 日(金)、6 月 13 日(金)、6 月 21 日(土)、6 月 27 日(金)、7 月 5 日(土)、7 月 11 日(金)、7 月 19 日(土)、7 月 25 日(金)となります。時間は 6 月は 13:30 (土曜日は 9:00) からですが 7 月は全て 9:00 からに変わります。

キンランの現状

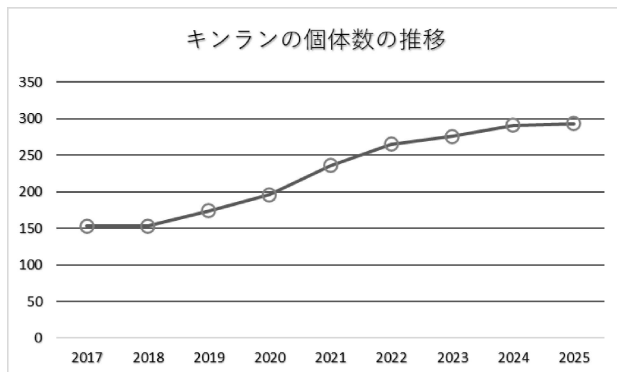
1. キンランとは

キンランは、ラン科キンラン属の多年生の地生ランで、5 月初旬頃に鮮やかな黄金色の花を咲かせます。この黄金色がキンランという和名の由来です。葉は長さ 15 cm 程度、10 枚未満で、葉に縦筋があります。

キンランは環境省のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されています。

2. 田和山のキンラン

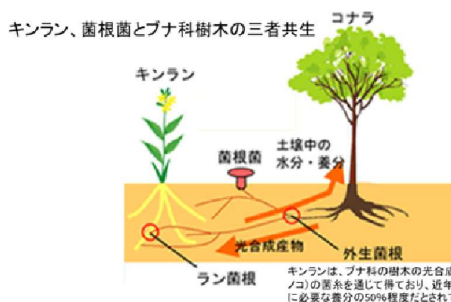
里山を育てる会は、2002 年から保全活動を始めましたが、全山をおおっていたモウソウチ



クヤマダケを整理していく過程で 2004 年頃に最初の個体が確認されました。その後保全活動が進む中で数を増し、今年(5 月 30 日現在)は 293 株が確認できます。

生育密度は、ヘクタール当たり 112 本とかなり高い密度です。

3. キンランの生態 (キンランは、里山保全のシンボルプランツ)



キンランは、菌根菌(ラン菌)が外生菌根菌でイボタケ科、ベニタケ科の担子菌(子実体としてキノコを作る仲間)であることが解っています。しかもそれは、クヌギやコナラなどブナ科の樹木の外生菌根菌です。そのためキンランは、ブナ科の樹木・菌根菌(外生菌根)・キンランの三者の共生関係が成立して初めて、数や分布範囲を拡げて生きていけます。

キンランは、緑色葉を持っているために光合成が出来ますので、菌依存度は 50 % ぐらいで、独立栄養植物と菌従属栄養植物の中間のグループになります。

今後の活動予定 6 月 6 日(金)、6 月 13 日(金)、6 月 21 日(土)、6 月 27 日(金)、7 月 5 日(土)、7 月 11 日(金)、7 月 19 日(土)、7 月 25 日(金)となります。時間は 6 月は 13:30 (土曜日は 9:00) からですが 7 月は全て 9:00 からに変わります。

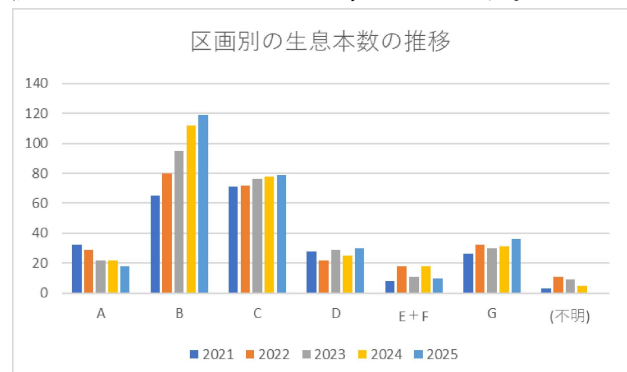
4. 今後の保全の進め方



キンランが減少した原因は、里山の管理放棄と考えられています。管理がされない里山の林床には様々な灌木類やササが繁茂し、落ち葉が堆積した状態となります。キンランに必要な外生菌根菌が発生し難くなり、キンランは生息範囲を拡大するどころか、縮小消滅に向かいます。

マツタケなどでは、林床の灌木の整理や、落ち葉や腐食層を取り除くことで、生産量が増えることが解っています。この知見や田和山での 10 数年の経験を基に、共生相手の外生菌根菌が発生しやすい環境づくりから始め、キンランの保全を目指します。

区画毎の生育株数を見ても下図の通り、差があります。その差は区画毎の植生や管理方法の差によって生じていると考えられます。



A 区、E 区、F 区は現在積極的な管理(林床の灌木の整理や、落ち葉や腐食層を取り除くこと)を行っていません。

キンランが珍しくなかった時代の里山を再現することが、キンランの増加につながると確信をしています。